

9 英語

第二言語習得における学びに向かう力の育成

—自己調整学習を促す指導の工夫と学びをつなげる振り返りの仕方について—

牧野 尚史

本論の要旨

昨年度の研究では、第二言語習得の認知プロセスに基づいた授業と単元を計画し、生徒の英語を活用する力を育成する方法を検証した。また生徒が「学びに向かう力」を身につける手立てとして単元計画とパフォーマンス課題に対するルーブリックの評価シートを活用し、生徒が学びに向かう力の変化を検証した。

今年度から新学習指導要領が全面実施となり、多くの情報の中から必要な情報を聞いたり、読み取ったりして、相手にわかりやすく伝えたり、意見を述べたりする力が求められている。つまり、英語の4技能を統合的に活用する力を育成する必要があるということだと捉えている。そのような英語を活用する力を生徒が身につけるためには、生徒自身が目標を持ち、目標を達成するための学習方略を活用し、課題に挑むこと、そして学習を振り返り、次につなげるという自己調整をしながら学びに向かう力が必要である。

そこで、先の研究(牧野、2019、2020)で実践してきた第二言語習得の認知プロセスに基づいた授業展開と評価ルーブリックシートの活用に加え、動機づけの工夫、単元の目標設定、学習方略の提示と共有、中間フィードバックを加えることで、自己調整学習する力を生徒が身につけ、さらには英語を活用する力も伸びると考えた。

■キーワード

動機づけ、単元の目標設定、学習方略、中間フィードバック、自己調整学習

1. はじめに

筆者の先の研究では、生徒がコミュニケーションの中で英語を活用する力を育むために、第二言語習得の認知プロセス(村野井、2006)の「気づき」→「理解」→「内在化」→「統合」を活用した単元計画や1時間の授業の流れを考え、実践してきた。実践を進める中で生徒が言語を習得していくうえで、この認知プロセスを考慮した単元計画や授業をするだけでなく、生徒が「学びたい」、「伝えたい」と思う動機と「どうにかして伝えよう」という粘り強さを持つ必要があると考えようになった。

平成29年3月31日に告示された新学習指導要領が中学校で本年度より全面実施となった。そこには言語活動の繰り返しを通じて資質・能力を育成する必要性が次のように述べられている。「実際に英語を用いた言語活動の中で思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識及び技能が習得され、学習内容の理解が深まり、学習に対する意欲が高まるなど、三つの資質・能力が相互に関係しあいながら育成される必要がある。」

つまり、英語を学習していくうえで、単語や文法といった知識の習得だけに留まるのではなく、どのような表現を使うのが適切なのかという技能が必要となり、そして、どのような目的・場面・状況なのかを理解したうえで、適切なコミュニケーションを図るための思考・判断・表現を繰り返し行うことが大切で、文法シラバスで構成

されている教科書では単元ごとに学習する文法項目があるが、一度きりの学びで終わることなく、繰り返し何度も使うことで知識と技能が定着していくことである。

そこで、第二言語の効果的な習得のプロセスを用いた授業の展開と、既習表現を繰り返し活用する場面を設定することが英語を活用する力を効率的に育成していくものとする。先の研究で実践してきた第二言語習得の認知プロセスを意識した単元計画と1時間の授業の流れを継続して実践することに加え、既習表現を繰り返し活用できる場面を設定することにした。

さらに、先の研究(牧野、2020)では英語を習得するうえで、生徒の情意面に注目する必要があると考えた。「英語を話せるようになりたい」、「英語が楽しい」と思えるような動機付けをすることは英語を習得するためには必要不可欠な要素である。情意面を育てることが、「英語を学習し続けていこう」、「英語を使って何とか相手に伝えたい」というねばり強さにつながると考える。

これらのことから、本年度は「単元計画と1時間の授業の展開」、「繰り返し活用する場面の設定」、そして「生徒の情意面を育てる」という3つの実践をし、研究テーマである「第二言語習得における学びに向かう力の育成」の検証をすることとした。

2. 研究の方法について

(1) 第二言語習得の認知プロセスをいかした指導

学習した表現を生徒が活用できるようにするために、第二言語習得の認知プロセスである「気づき」→「理解」→「内在化」→「統合」のプロセスを単元の中にちりばめるようにした。特に「気づき」の部分に注目をし、活用してほしい表現を繰り返し生徒に気づかせるように工夫し、表現の習得を促す工夫をした。

さらに単元末にはパフォーマンス課題を設定し、生徒が英語を活用する機会を設けるようにした。その際、活用する表現を生徒に指示することはせず、生徒に自由に発言をさせるようにした。また1時間の授業の中でも活用するための活動を取り入れるようにし、気づきから統合までの流れを意識した指導案を考えるようにした。

(2) 繰り返し活用する場面の設定

知識・技能の習得のためには思考・判断・表現を繰り返す必要があると新学習指導要領では述べられている。繰り返す学習として同じ表現を用いて語彙を変えて練習させるパターンプラクティスが考えられるが、その方法では生徒の思考・判断・表現は働かない。生徒が知識・技能を習得するために思考・判断・表現を繰り返し活用する場面として、単元の終わりにパフォーマンス課題をに繰り返し取り組ませるようにした。本年度、筆者は第1学年を担当している。1年生の段階では英語を使って自分のことや自分の身の回りのことを表現する方法、そして英語でのコミュニケーションのやり取りを中心に学習していく。そこで、繰り返すパフォーマンス課題として、Small Talk をすることにした。この課題を選んだ理由としては、話す活動のなかでもやり取りの方が苦手であるという意見が生徒の振り返りから多く見られたからである。

Small Talk のパフォーマンス課題を繰り返すことで、生徒が英語を活用することに対する自信度がどのように変容したかを生徒の振り返りから検証した。

(3) 生徒の情意面を育てる

第二言語を習得するためには、生徒の情意面が習得に大きく影響してくる。特に日本のようなEFL(English as a foreign language)の環境下では、日常生活で生徒が英語を活用する必然性をあまり感じない。そのため、英語学習を続けていこうと思う動機をいかに持続させていくかが課題である。生徒の学習に対する動機付けとして指導と評価の一体化が重要であると考え、先の研究(牧野, 2020)では単元計画の進め方を示した単元計画表と単元の終わりに実施するパフォーマンス課題の評価をルーブリックで作成した評価シートを単元のはじめに生徒と共有するようにした。また振り返る時間を単元

の終わりに設定し、生徒が自らの学びを客観的に振り返り、次の学習へとつなげることができるようにした。

本年度はこれらの実践に自己調整学習の視点を取り入れ、改良を加え、実践することにした。自己調整学習とは、ジーマン(Barry J. Zimmerman)によって提唱された学習研究の理論的枠組みである。ジーマンによると自己調整学習には①予見、②遂行/意志コントロール、③自己省察の3つの段階を提案している。詳しくは以下の通りである。

自己調整学習の3つの段階

①予見の段階

目標設定や方略的な計画を含む課題分析の段階である。そして自己の学習についての自己効力信念や学習の結果についての期待、課題に対する内発的興味、目標志向性を含む自己動機づけ信念といった感情の自己調整の段階でもある。

②遂行/意志コントロールの段階

イメージ化、自己教示、注意の焦点化、そして課題方略の適用を含む自己統制の段階である。また課題を達成するために何がもっともうまくいくかささまざまな方法を試す自己観察の段階でもある。

③自己省察の段階

何らかの基準に基づくパフォーマンスの自己評価、結果の原因帰属を含む自己判断をする段階である。またその後の動機づけを向上、低下させる自己満足の程度、より効果的な学習方略の使用や自己のイメージの保持につながる適応的、防衛的調整を含む自己反応といった感情の自己調整が含まれる。

3つの段階のうち、2つの段階(予見と自己省察)で感情の自己調整が含まれている。これはジーマンによると感情のコントロールが自己調整学習には不可欠な要素であるということである。

以上の内容をふまえ、本年度の実践で加えた改良は以下の3点である。

- ・単元のはじめに目標を設定する。
- ・単元の途中で中間フィードバックをする。
- ・学習方略と次の学習に対する展望について振り返る。これらの内容を単元をとおしてすることで、生徒の自己調整学習能力を育み、生徒の学びに対するねばり強さや英語学習に対する動機づけにつながるかどうかを検証することとした。

検証方法としては、アンケートを実施し、目標設定、中間フィードバック、そして振り返りの取組がどのように学びに影響したのを見るようにした。

3. 研究の実践について

(1) 第二言語習得の認知プロセスをいかした指導の実践

① 気づき

生徒に注目してほしい単語や表現に気づかせるための工夫として、オーラルインタラクションを活用したやり取りを生徒とするようにした。特に教科書本文の導入のときや内容理解のとき、さらには復習のときに生徒とやり取りをするようにし、新出単語や表現をたくさん活用するようにし、その中で修正フィードバックや意識づけをさせるような工夫をした。オーラルインタラクションで生徒に与えた修正フィードバックはリキャスト(Recast)や引き出し(Elicit)である。リキャストとは生徒の間違いを訂正して教師が言い直す方法である(図 1)。引き出しとは、教師が生徒へ発言してほしい単語や表現の一部分を言い、生徒が教師の意図するものに気づかせる方法である(図 2)。図中の T は Teacher, S は Student を表す。また図中のイタリックの箇所が修正フィードバックを与えている部分である。

T:	Do you know him?
S:	Yes, I do. He is Kaito.
T:	That' s right. What sport does he like?
S:	He like soccer.
T:	Yes. <i>He likes soccer.</i>

図 1 修正フィードバック例(リキャスト)

T:	This is Ms. Cook. Where did she go during winter
S:	vacation?
T:	She…(沈黙)
S:	<i>She wen…</i>
T:	Oh, she went to London. Great.

図 2 修正フィードバック(引き出し)

また視覚的に気づかせる工夫もできる。例えば、リスニングをした後のスクリプトを見せるときに、注目してほしい単語や表現の色を変えることや文字のサイズを大きくしておくことなどである。生徒に気づかせる工夫をちりばめたあと、生徒が理解し、インテイク(内在化)する段階へとなり、最後の統合、つまりアウトプットへと進んでいく。本年度実施したパフォーマンス課題は①自己紹介、②ロールプレイ、③Small Talk、④クイックレスポンス、⑤お気に入りの人物/キャラクター紹介、⑥ポスター作成(メッセージ入り)、⑦学校紹介の7つである。このうち、⑥はライティングであり、それ以外はスピー

キングの課題であった。生徒が実際にパフォーマンス課題で活用できるようにするためには、第二言語習得の認知プロセスを意識した授業や単元指導をする、ことが大切である。そのため、1時間の授業でもパフォーマンス課題への準備のための、いわば小さな統合を入れるようにした。例えば、パフォーマンス課題が「好きなことやできることを含めた自己紹介をALTにしよう」だとする。単元計画として5時間目にパフォーマンス課題をするとすれば、1時間目から4時間目までに小さな統合を入れるようにした(表 1)。

表 1 課題に向けた小さな統合

1 時間目	簡単な自己紹介をしよう
2 時間目	インタビューをしよう(好きなこと)
3 時間目	インタビューをしよう(できること)
4 時間目	自己紹介をしよう(リハーサル)
5 時間目	パフォーマンス課題(自己紹介)

小さな統合を入れ、スモールステップをすることでパフォーマンス課題に対する自信を上げていくことが大切であると考えた。また今の自分に何が足りないかを知る機会にもなり、生徒各自の学びへとつなげる意図もある。このように生徒の気づきを大切に、統合へ向けた理解と内在化を繰り返すような授業プランを立て、実践した。この第二言語習得の認知プロセスは気づきからはじまる。生徒が「この表現はこういう意味かな。」と推測したことが、理解することによって確認することができる。さらに、内在化から統合までの過程を経ることで、自信へとつながる。これは、生徒の自己有用感にもつながるものであると考える。またノートにも生徒がその時間気づいたことを書かせるようにした。そうすることで、生徒が何を意識して学習に取り組んだかを可視化することができ、振り返るときのポイントにもなると考えた。

(2) 繰り返し活用する場面の設定の実践

教科書は文法シラバスで構成されているため、毎時間新しい文法を学習することになる。そのため、学習した表現が定着する前に、新しい表現を学習することになり、既習の表現を活用するまでに至らないことが課題であった。1時間ごとに練習や活用をして終わるのではなく、生徒が繰り返し同じ表現や単語を使うような仕掛けが必要である。方法としては、教師が生徒とオーラルインタラクションをする中で、既習事項の表現を使ったやり取りをするように心がけたうえで、リスニング・スピーキングで活

用する方法がある。もう1つの方法は、同じパフォーマンス課題を繰り返すことである。ここで言う活動とは、パフォーマンス課題のことである。本年度実施した7つのパフォーマンス課題のうち、Small Talkの課題を繰り返し実施した。さらに年間をとおしてSmall Talkの課題を2回実施した。同じ課題を複数回繰り返し行うことで、表現を何度も使うようになる。言語は使えば使うほど定着し、活用できるようになる。また学習を進めるなかで言語材料も増え、前は言えなかったことも、次には言えるようになって活用にすることができるようになるかもしれないと考えた。このように、同じ活動を繰り返し実施することで表現の定着だけではなく、「次はこれができるようにがんばろう。」という生徒の動機づけにもつながると考える。さらに、「前よりは上手にできた。」という経験をするのであれば、生徒の自己効力感にもつながると考える。

(3) 生徒の情意面を育てる実践

生徒の情意面を育てる手立てとして、本年度は自己調整学習に着目した。生徒の学習を調整する力を育成するために実践したことを紹介する。

① 単元計画シートの取組

Unit 4 Friends in New Zealand

Class: _____ JD: _____ Name: _____

ゴール: 相手のことをもっと知り、自分のことをもっと知ってもらいやり取りをしよう
タスク: Small Talk 2 ～目標せ1 余裕で5ターン以上～

★1: どんな表現が使えそう?

<input type="checkbox"/> 自己紹介で使う表現 (Unit1) I'm ~. / My name is ~. Call me ~. I'm from ~. / I like ~. My favorite ~ is ... I can ~. / I want to ~.	<input type="checkbox"/> Q & Aで使う表現 (Unit2, 3, 4) Are you ~? / Do you ~? Can you ~? What is your favorite ~? What ~ do you like? What do you do after school? What time do you ~? When is ~? / When do you ~? Where is ~? / Where do you ~? How are you? / How do you ~? How is the weather in ~?
<input type="checkbox"/> 学校、教科、学校行事の表現 Word Room10, 11, 12 p156~p157	<input type="checkbox"/> リアクションワード I see.(なるほど) / Really?(本当に?) That's nice.(いいね) That's too bad.(それはひどい) Wow!(すごい) / Cool!(かっこいい)

★2: 学習方法

<input type="checkbox"/> Small Talk	<input type="checkbox"/> Q & A (即答練習)
<input type="checkbox"/> 2文目を加える/リアクションをする	<input type="checkbox"/> ぼそぼそ Speaking
<input type="checkbox"/> ペアでの音読練習	

★3: お役立ちコーナー:
 P54 Tool Box, P56 便利な表現, P96 Tool Box, P100 便利な表現

★4: Teamsに解解をしたら口に入れておこう!

Unitの目標を書こう!

目標達成のためにどんな方法で学習するか書こう! (上の★2から選んで書いてもいいよ)

タスクに対する今の自信度とその理由は? (Unitのはじめに記入しよう)

タスクに対する今の自信度とその理由は? (Unitの中間に記入しよう)

次、同じようなタスクがあれば達成する自信度とその理由は? (Unitの最後に記入しよう)

Unit4の振り返り

図3 単元計画シート①

生徒の学びで大切なことは、何を学び、どんな力を身に付けることができるかを知ったうえで、学習に取り組むことである。実践として、新しい単元のはじめにガイダンスの時間を設け、単元の最後のパフォーマンス課題が何なのかを共有するようにした。またどんな表現が使えそうかをあらかじめ記載しておくようにした。この意図としては、生徒の自主的な学びを促すことである。生徒がパフォーマンス課題でこの表現を使ってみようと考え、単元の中で何度か使い、活用するところまでの流れも意図している。またこの単元計画シートがあることで、やるべき課題が明示化されているため、生徒が目標設定をしやすと考えた。

② ルーブリック評価シートの取組

指導と評価の一体化は、生徒の学習への動機づけが必要不可欠なことである。どのように評価されるのかが不透明なままでは、何をどのようにがんばればいいのか分からないまま学びが進んでいくことになる。特に英語学習においては、教室内だけの学習では定着には不十分である。普段から英語に触れ、声に出してみたり、書いてみたりすることで知識や技能が定着し、活用できるようになる。生徒が教室外でも自主的に英語学習に取り組もうと思うために大切なことは目標を持って学習に取り組めるようにすることである。

しかし、生徒が一番関心。評価とは外発的動機づけになるかもしれないが、生徒が目標を持ち、それに向かって学習していく。その中で目標達成に向けた自信を少しずつ積み重ねていく。そして、実際に目標を達成したときには達成感と自己効力感が備わってくる。そのような過程の中で、はじめは外発的な動機づけであった評価が内発的な動機づけに変化していくのではないかと考える。その意味で生徒が自らの学びを調整していくためにこのルーブリック評価シートは効果があると考えられる。

③ 自己調整学習のための取組

本年度の実践では、自己調整学習の3つの段階(予見・遂行/意志コントロール・省察)を意識した取組として、単元のはじめに目標設定をすること、単元の途中で中間フィードバックをすること、学習方略と次の学習に対する展望について振り返ることの3点の実践をした。

方法としては、MicrosoftのFormsを使い、生徒はタブレットを使って入力する。データが自動的にExcelに集計されるので、そのデータをWordの差し込み機能を使い、生徒個人の単元をとおした目標シートとなるように改良を加えていった。

自己目標シートの項目としては以下のようなもの

を設定した。まずはじめの目標設定の段階では、「目標達成への自信度」、「達成したい評価」、「目標を達成するために単元をとおして取り組むこと」を記入させた。そして、単元途中の中間フィードバックでは、「現在の目標達成への自信度」、「目標達成のために今から取り組んでいくこと」を記入させた。最後の振り返りでは、「目標達成のためにどんな方法で学習をしたか」、「目標達成のために費やした家庭学習時間」、「単元全体の振り返り」をさせるようにした。生徒は単元で3回自分の学習について考える時間を持つことになる。客観的に自分の学習をみる機会は学習を調整していくことにつながるよい手立てであると考えられる。

4. 成果と課題

(1) 第二言語習得の認知プロセスをいかした指導

生徒の気づきを促し、理解から内在化、そして統合へと持っていく認知プロセスは第二言語習得で大切なプロセスであると考えられる。オーラルインタラク션을教師と生徒がする中で、修正フィードバックを与えたり、気づいてほしい言語材料を焦点化するような工夫をしたり、さらなる気づきを促進する取組を行ってきた。特に修正フィードバックで気づきを促された生徒はその表現に対して理解を深め、活用へと学びが促進されるのではないかと考える。実際に修正フィードバックを与えられた生徒とそうではない生徒がその言語材料の活用にどのような影響を与えられているかを比較検証するまではできていない。ただ、気づきを促された生徒はその表現に対する意識が他の生徒よりも強く働くはずである。また周りで聞いている生徒にも少なからず気づきの影響はあるはずである。学びにおいて、この気づきや発見が理解へとつながり、定着されてくものである。

今後もこの第二言語習得の認知プロセスをいかした授業の実践を続けていくつもりである。生徒の気づきが統合の部分でどのように活用されているかを見とることは難しいように思うので、今後生徒の英語活用能力に気づきがどのような影響を与えるのかを検証する方法を考えていきたい。

(2) 繰り返し活用する場面の設定

繰り返し活用する課題として Small Talk にすることとした。2. (2)にもあるように、生徒が苦手とする活動の1つである。苦手な理由として考えられることは、即興でのやり取りが必要とされるからではないかと考える。自己紹介や他人紹介、プレゼンテーションなどはあらかじめ話す内容を準備すること

ができる。一方、Small Talk はトピックが用意されているものの、あとはペアでお互い自由に発言をする活動である。相手が言うことに対して、リアクションをしたり、さらにフォローアップクエスチョンなどをしたり、話題を広げる必要がある。さらに、会話なのである程度のリズムも求められる。生徒が苦手をするこの活動を繰り返すことで、表現の定着を図るとともに、情意面でどのような変化があるかを生徒の振り返りから検証した。

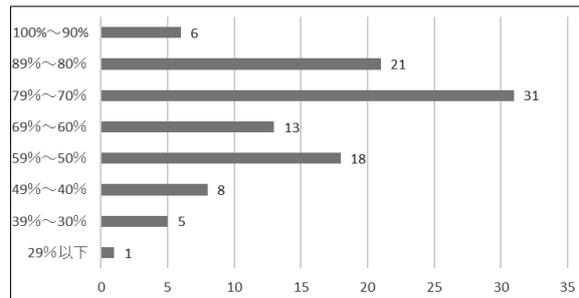


図4 Small Talk 1回目(単元はじめ) n=103

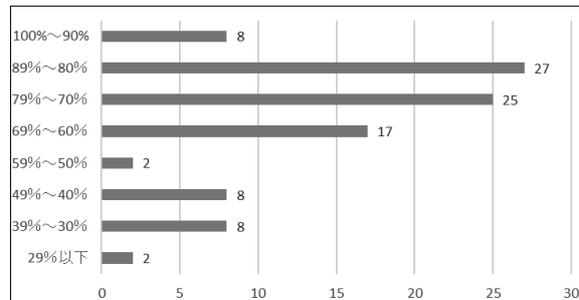


図5 Small Talk 1回目(振り返り) n=97

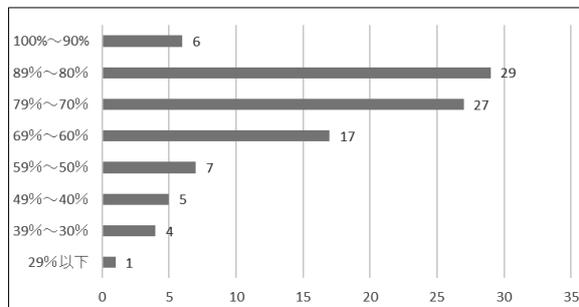


図6 Small Talk 2回目(単元はじめ) n=96

上記の図4と図5は1回目のSmall Talkを実施したときの最初と終わりに生徒に調査した自信度である。振り返りのときは、今後同じ課題をすると想定して自信度を聞いてみた。1回目のSmall Talkでは、課題をする前とした後では、生徒の自信度にさほど大きな変化を見ることができなかった。50%以下に注目すると自信度を下げている生徒が増えている。生徒の振り返りからは、「思っていたより上手くできなかった」や「緊張してしまい、言葉が出てこなかった」といったコメントが見られた。下の図6(n=96)は、2回目のSmall Talkのパフォーマンス課題をする単元のはじめに生徒が目標設定した際の

自信度である。1 回目の目標設定のときと比較してみても、2 回目のはじめの生徒の自信度に大きな変化は見られない。60%以上の数は1 回目の振り返りとほぼ同程度であった。

一方、下の図 7(n=104)は 2 回目の Small Talk の振り返りのときの生徒の自信度である。

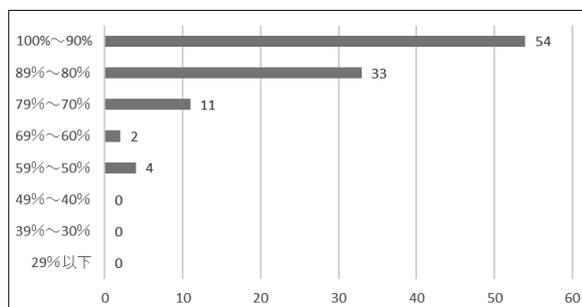


図 7 Small Talk 2 回目(振り返り) n=104

1 回目のときと比較しても明らかに自信度が大幅に増えている。理由としては、前回できなかった反省を生かし、何をすべきかがより明確になり、学習の方法を見直したことが考えられる。実際、生徒が Small Talk をしている様子を見比べても 2 回目の方が明らかにスムーズに会話を続けることができるようになってきている。この結果いえることは、同じ活動を繰り返し行うことで言語は定着すること、そして自らの学習方略を見直し、改善することができたということである。これは同じ活動をするので前回の学びがより次の学びへとつながったと言えるのではないかと考える。

(3) 生徒の情意面を育てる

生徒の自己調整学習能力を育成するために、単元計画シートの作成、目標設定、中間フィードバック、振り返りの取組をしてきた。それらの取組が生徒にどのような影響を与えたのかをアンケート形式で生徒に調査をした。以下、その結果を示す。

①単元計画シートの取組

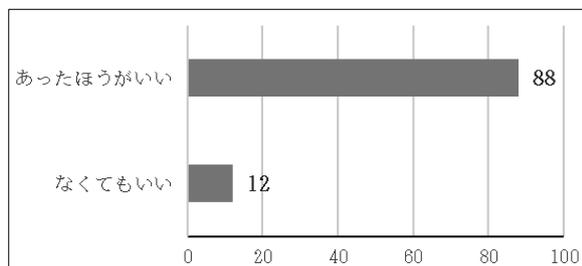


図 8 単元計画について n=100

図 8 は単元のはじめに配布する単元計画シートについての結果である。単元ごとに配布してガイダンスをしているが、生徒の自己調整学習にとって必要なものかどうかを調べてみた。結果から約 9 割の生

徒が必要としていることがわかった。その理由については以下のようなコメントが見られた。

- ・その授業を受ける前に何を学習していればいいかわかるし、自分なりにその時間の目標を立てられるから。
 - ・何をどのように学習するのかあらかじめ知っておくことで、それに合った勉強方法を考えることができるから。
 - ・何のためにしている学習過程なのかわかる方が理解が深まる。
 - ・どんな感じで授業が進むのかをしり、それによって家庭での学習計画をたてられたから。
 - ・先を見通して学習できるから。ここの学習苦手だな、予習しておこうなどの計画を立てられる。
- アンケートの結果から、単元計画シートを参考に、生徒が学校だけでなく、家庭で学習に向かう様子や先を見とおして学習に取り組む様子、そして学習方略を考える様子をうかがうことができた。これは、生徒が学びを調整している結果であると考えられる。

②ルーブリック評価シートの取組

指導と評価の一体化を図るためにルーブリック評価シートを作成し、毎単元のはじめに生徒に配布して内容を共有する取組は生徒にとって必要なことであったのかをアンケートで調査した。下の図 13 はその結果である。

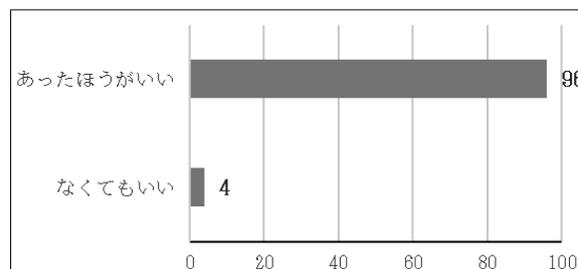


図 9 ルーブリック評価シートについて n=100

結果はほとんどの生徒がルーブリック評価シートは必要であるという回答であった。主な理由としては以下のコメントがある。

- ・目標が立てやすかったし、評価基準が分かることで、やる気がでたからです。
- ・高い目標に向かって学習することができるから。
- ・自分が優先的に何をすればいいのかが分かるし、単元の具体的な目標も知れるから。
- ・どの基準で評価が決まるのか明確にしておいてくれたことで、単元内でどのように頑張ればよいのか考えやすくなっていたから。

生徒のコメントからは、ルーブリック評価シートがあることで、より高い目標を持って学習に取り組む生徒が多いことが分かる。また学習すべきポイントが明確になり、単元の 1 時間 1 時間の学習がどうい

う意味があるのかを分かったうえで、学習に取り組んでいる様子も窺うことができる。これらは、動機づけや学びに対する定着に大きな影響を与えるものであり、生徒の学習に有効であると言える。

③自己調整学習 3つの段階の取組

次の図 10, 図 11, 図 12 は自己調整学習の 3つの段階の取組について生徒にアンケートをした結果である。それぞれの取組が学びに影響があったかどうかを調査した。

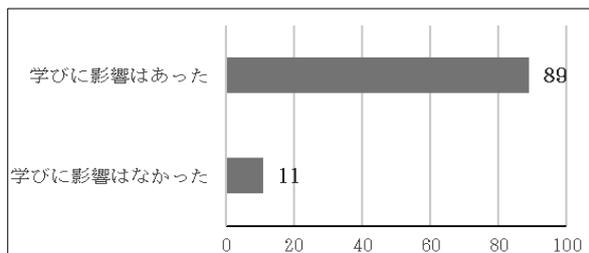


図 10 単元の目標設定について n=100

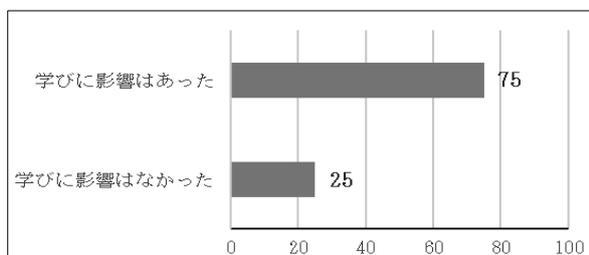


図 11 中間フィードバックについて n=100

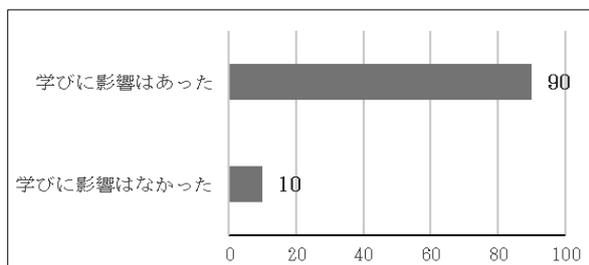


図 12 振り返りについて n=100

目標設定と振り返りの取組については、どちらも 9割近くの生徒が自身の学びに影響があったと回答した。以下はそれらに対する生徒の主な理由である。

単元の目標設定に対する生徒のコメント

- ・自分の目標があったほうが勉強が進めやすい。
- ・最初に目標を設定することで、途中からどのように学習すればよいかわからなくなったときに目標を参考に学習に取り組めたから。
- ・自分の目標を持つことで、「他人に言われたからやる」よりも向上心があった。
- ・日常生活でも、目標達成のために家族に英語で話してみたりしたから。
- ・目標を自分で決めることで、人に決められてやるわけではないので、やらなければいけないとか、頑張ろうという気持ちがより出やすくなったと思っ

たからです。

- ・目標を設定することで達成できた時に達成感がある。
- ・これまでは自分の目標があまりなかったが今回は自分で目標を立てて、これまでの学習よりもやる気が出て家庭での学習時間や学校でも英語のタスクに向けての学習の時間が増えたから。

生徒のコメントから自分自身で目標を設定することで、学習に対する動機が変わることが見てとれる。中には、目標達成のために家庭で学習する生徒も見られる。これは生徒が自ら学習を調整していることに他ならない。

これら 2つに対して、中間フィードバックでは「学習に影響があった。」と回答した生徒は 7割強にとどまった。その理由としては、以下のような内容であった。

中間フィードバックに対する生徒のコメント

- ・初めの時と目標が変わることが少なかったから。
- ・最初に立てた目標は最後にすることの目標だから、中間にしても最初の目標と似てしまうから。
- ・単元の初めにする学習目標と書いている内容が大体被っていたため、あまり必要ないと思ったから。

「学びに影響はなかった。」と回答したほとんどの生徒が「最初の目標設定とかわらないから。」という理由であった。これらの生徒たちの特徴を見ると多くの生徒がある程度自身の学びを調整できている生徒、つまり学力が高い生徒であった。この 2割強の生徒以外は「目標を見直すいい機会になった。」や「あらためて自分の目標を確認し、それ以降の学習に役立てた。」と回答していた。多くの生徒にとってゴールまでの途中で目標を見直すことは自分の学びを見つめなおす機会となり、それ以降の学習を調整することにもつながっている。

自己調整学習の 3つの段階の最後が省察、つまり振り返りである。単元をとおして学習してきたことやパフォーマンス課題を終えて目標は達成できたかなど、生徒が自分の学習を振り返り、次の学習へとつなげる段階である。9割の生徒が学びに影響があったと回答をした。以下はその主な理由である。

振り返りに対する生徒のコメント

- ・振り返りをすることによって次の英語の勉強に役に立ち、次の単元のいい例となったから。
- ・自分がやってきたことは正しかったのか全体を通して振り返ることができ、次の単元でその反省を生かすことができた。
- ・自分の評価もしくは成績が返却された後なので、自分の勉強方法がよかったのかどうかもう一度見直すことができるため、次の学習にもつなげてい

けるから。

- ・自分の中で、学習を通して、何を学んだのか、身についたのが、整理されてよかったから。
- ・最後に振り返りをして、その単元での自分を振り返ってみることで、その次のUnitで目標を立て、その目標に向かってどのように学習していけばいいか自分で予定を立てやすかったから。
- ・単元が終わって振り返ることで自分の成長を感じることができるしできなかったことなどは次に生かそうとできるから。
- ・自分は目標を達成できたのならこのぐらい出来るという実感がわくし、目標を達成できなくても自分はどのぐらいできるかしれるから。

生徒のコメントからわかることは、振り返りをすることによって単元での学習方略が正しかったのかどうかを見直すよい機会となり、次の単元での学習方略を考えることにもつながっているということである。また単元をとおしてできるようになったことを振り返ることで、「自分ならできる。」という自己調整に必要な自己有用感にもつながっているのではないかと考える。これらの結果から、多くの生徒が目標設定、中間フィードバック、振り返りの3段階のステップを踏むことで、自らの学びを調整していることがわかる。また「目標達成のためにがんばろう。」という生徒の情意面や「どうすれば目標を達成できるか。」といった学習方略の検討にも影響を与えていると考えられ、この取組は生徒の自己調整学習能力を育成し、英語学習への動機づけに効果的であると言える。今後は、3つの段階で生徒が考える視点を絞り、効果的に自己調整できるような工夫をすることや自己目標シートを収めるファイルを用意して、ポートフォリオ形式で生徒がどのような自己調整をしているかを年間をとおして見るができるような工夫をすることでより効果的に自己調整学習を促すことができるのではないかと考える。

5. 今後の研究について

本年度は英語を活用する力を育成するための実践に加えて、生徒の情意面である動機づけや自己調整学習の育成のための実践を行ってきた。本年度実施した取組が生徒の自己調整学習能力や動機づけに影響を与えていることがわかった。これは英語を学習するうえで必要とされるねばり強さが身についていると考えられ、来年度も改善すべきところを見直し、実践を続けていきたい。生徒の英語を活用する能力に関しては、本年度は検証するまでは至らなかった。そのため、今後は第二言語習得の認知プロセスの実践をし、英語活用にどのような影響を与えているか

を検証するための方法を考え、研究を進めていきたい。

さらに、来年度からは新たな視点の実践にも取り組んでみたい。それは、小中連携した英語学習の在り方である。小学校では令和2年度(2020年)から外国語が教科として5年生以上を対象に始まった。小学校で生徒は英語の音や表現に慣れ親しんで中学校へとあがってくる。今後は小学校との連携は必須であり、どのような接続をするかが課題となる。小学校でも振り返りをさせているところは多い。また小学校で使っている教科書で習う内容や活動は中学校でも繰り返し発展的にしているものがある。それらのことから、学びの振り返りと活動の2つの視点で小学校と中学校の学びをつなげることができるのではないかと考える。小中連携を効果的に行えば、生徒の英語を活用する力もさらに向上させることが期待できる。どんな生徒も英語がはなせるようになりたいと思っている。その思いを受け止め、来年度もより効果的な英語教育の実践をしていきたい。

参考文献

- 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語編」
- 村野井仁「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」(2006)
- ディール・H・シャンク、バリー・J・ジーマーマン 編著 塚野州一 編訳「自己調整学習と動機づけ」(2009)
- L.B. ニルソン 監訳者 美馬のゆり、伊藤崇達 学生を自己調整学習者に育てるーアクティブラーニングのその先へー (2017)
- Long, M. H. 「The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie, & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of Second Language Acquisition*」 (1996).